入賞作品紹介

〈高松キャンパス　読書感想文〉

優秀賞

「学校という社会」

建設環境工学科２年　岡田加奈子

この本は昔、一度読んだことがある。その頃の私は中学三年だった。それは、私が一番学校を拒絶して疑いと諦めを感じていた頃だと思う。その頃は話の中の嫌な大人ばかり目についた。そして、主人公たちの行動を綺麗事だとしか思えなかった。しかし、夏休み前に図書館で感想文を書く為の本を探していた時、この本がふと目に付いた。大した理由もなく、ただ何となくもう一度読んでみたくなった。だから、ついでにこの本で感想文を書く事に決めた。

この小説は読み易い。単純に難しい表現や言い回しが少ないと言うのもあるだろう。しかし、読み進めて行くと知らないうちに、爽やかで妙に現実味溢れる独特の世界観にどっぷりと浸かっている。赤川次郎という作者はとても有名だからこそ、小難しい文章を書く様な印象を受ける。それはこの作者がミステリー小説メインだからというのもあるかも知れない。しかし、この本はミステリーではない。少し重すぎる気がするが、どちらかと言えば青春物語だと思う。舞台は高校で、学校という社会への恐怖から記憶を無くしてしまった『走れない』というか、『走る事を頑に拒む』少女と、教師に対して辛い過去を持つ少年が様々な出来事を通して成長する切ないけど、感動もする話である。

初めて読んでから約二年が経った今、改めてこの本を読むと昔とは全く違った感想を持った。昔はあれ程綺麗事に見えた人物が『完璧』ではないと感じた。きちんと『人』なのだと思った。純粋な様に見える主人公はあっさりと人の彼氏を取った。悪役のように見えた同級生は最後はいい子になった。主人公を助ける役の男の子は浮気と言われても仕方ない行為をする。学校に立ち向かった先生は不倫相手の愛する男性を助けるためだった。一人一人の行動と考えに注目しながら読むと、この話の中には、よくある品行方正で辛い過去を抱え頑張るかわいそうな主人公や、自分が思う正しい事をつらぬこうとする学生思いのいい先生なんて居ない。しかし、だからこそいいのだ。だからこそ現実に近く、引き込まれ易い。

この本を読み終えて少しインターネットでこの本について調べてみた。この本のなかで起こる事件の一つに遅刻して来た女子生徒が先生が閉めた校門に挟まれて死亡するという事件がある。これを目撃した事により主人公は走れなくなるという設定なのだが。そして、私はこの事件が実在した事を知った。『神戸高塚高校校門圧死事件』と呼ばれるこの事件。この事件が実在していたことに驚いた。懲戒免職に禁固刑一年、執行猶予三年、それが実際に門を閉めた教員に対する判決だ。学校側の意見には女生徒を批判する様なものもあったようだ。私には生徒が悪いのか教員が悪いのか分からない。その女生徒が遅刻しなければ事件は起きなかったと言う意見がある。確かにその通りだ。しかし、それなら先生は悪くないというのは違う気がした。一方、気が付かずに門を閉めて生徒の命を奪った先生が悪いとも言えない気がした。そして、この先生が書いた本を探しに行った。在った。少し読んで悲しくなった。「俺は悪くない」と遠回しに書いていた。反省文の様な文章を望んでいた訳ではない。しかし、必死すぎる弁解に呆れた。これが教師だったのかと思うとがっかりした。そして、＜「大人には大人の事情がある」それも確かだろう。でも、「大人には大人の責任もある」のではないか＞というこの本の一説を思い出した。

私はこの話を通して人間の醜さを見た気がした。現実は未だいろいろな人の心に深く刻まれるこの悲惨な事件もこの小説内では安易だと思われるほどさっぱりとまとまっている。しかし、現実がどうしようもないだけに、このさっぱり感が良いのだ。こうなって欲しいという期待や希望を感じた。

私の知っている学校には全て規則がある。逆に、無い学校など聞いた事もない。そして、先生が成績という言わば学生にとってのライフポイントを握っている。それは言い換えれば大人による独裁社会なのかもしれない。しかし、そうしなければ違う問題が発生する。だからそれは仕方のない事だと思う。そして、学生は少なからず学校という社会に傷つけられる。しかし、その傷を癒すのもまた学校だ。というか、学校にある友情や部活動、先生の行動なのだ。学校という閉鎖社会は特別な環境だ。私はこの本を通して、様々な事を調べて、知って『学校』という場所をもう一度考えさせられた。私は高専という学校で傷付きもしたが、たくさんの傷を癒してもらった。

私の校庭に虹は落ちた。だからまた前を向いて頑張ろうと思う。

『校庭に、虹は落ちる』　赤川次郎　新潮社

佳　作

「選択－生きる道、そして…－」

1年3組　上井　浩輔

一九四五年八月十五日。日本がポツダム宣言を受諾し、玉音放送を行った日であり、日本では太平洋戦争の終戦記念日である。今年で六十六回目となる終戦記念日を前に今、私は一冊の本を読み、考えていた。読んだ本の名前は「永遠の0（ゼロ）」。この本を初めて読んだのは、今から約一年前。中学校最後の夏だった。私は戦闘機を始めとする軍用兵器類が好きだ。この本を読み始めた最初の理由は、旧日本帝国海軍の誇る『三菱零式艦上戦闘機、通称零戦』が登場するからであった。

この本の物語は、自分の祖父が太平洋戦争で戦死していたことをしった主人公が、姉と共に、かつての祖父の戦友の元をたずね、祖父の生涯を調べていくというものである。

私はこの本を読み終えて、頭をたたかれたような衝撃を受け、涙が止まらなくなったのを覚えている。「娘に会うまで死ねない。」そう言い続けて、かたくなにまで死ぬことを恐れていた主人公の祖父、宮部久蔵海軍少尉がなぜ、唯一残されて生き残る道を捨て、特攻を行なったのか、この本を最初に読んだ時にその答えは出なかった。そこで今回、あらためてこの本を読みかえしてみた。

宮部久蔵は中国方面や真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦、ガダルカナル攻防戦と戦い抜き、一度教官となり、新人飛行兵を育てたのちに特攻隊員として南西諸島沖に散っていった。宮部とはどういう人だったのか。物語の中でも、そのことは、一つのキーワードとしてあげられた。私もそのことは気になった。当時の軍隊を少しかじっていた私としては、本の背表紙に書かれていた「娘に会うまで死ねない。」という言葉をつねに話していたということにとても驚いた。そんなことを言えるのなら、さぞかし怖がりな人なのだろうと思った。しかし本文で、宮部のかつての戦友がかたった宮部久蔵イメージはさまざまだった。戦いの天才だが臆病者、でも戦えばとてつもない強さ。そして口ぐせは「娘に会うまで死ねない。」これが宮部久蔵という人であった。しかし私は本を読む中で宮部のもう一つの顔に気がついた。それは誰よりも強く優しいということだ。つねに部下に気をくばり、自分が守り抜けなかった仲間のために涙を流し、あやめた敵兵のことを悔む。そして部下やおしえ子、戦友に「死ぬな」と言い続けてきた。

しかし宮部は特攻に向かった。「娘に会うまで死ねない」と言い、「死ぬな」と伝え続けてきたのに、だ。私はそのことが気になった。確かに兵士にとって命令は絶対だ。それは今も昔もかわらない。まして旧日本軍で命令は今以上に絶対だったはずだ。それでもやり方はあったはずだ。まして宮部は死ぬことを何よりも嫌っていた上、とてつもない腕をもっていた。しかし宮部は死ぬ道をえらんだ。それも生きる道がきちんと残されていたのにだ。

宮部は教官時代に敵に奇襲を受けた。しかしその際教え子の身をていした援護で九死に一生を得た。宮部が特攻に行く隊にその教え子がいた。そして宮部はその教え子と本来乗るはずだった零戦と交換した。そして教え子の、本来宮部が乗るはずだった零戦は、発動機（エンジン）の不調で不時着しそのまま終戦を向かえた。その教え子は不時着した後、機内で宮部の走り書きをみつけた。「あなたがもし生き残れたなら、私の家族をたのみます。」そう書かれていた。つまり宮部はこの零戦が不調であることに気がついていたのだ。

そのことを知った時、私の頭は真っ白になった。自分は日ごろから生きたい、死ぬわけにはいかない、と。周りの一部は態度や口に出さなくても生きたいと思っている。そこに自分一人生き残る道ができた。そしてとなりには自分をたすけてくれた命の恩人がいる。なんと無情な選択しなのか。私なら生きようとする。平和な時代を生きる者としては普通の思いだと思う。しかし、戦時下であったとしてもおそらく生きようとしたはずだ。目の前に生きられるかもしれない道があるのにそれをみすみす捨てたりはできない。それは私が弱いからにほかならない。しかし宮部は命の恩人にゆずった。ずっと生きたいと言い続けた宮部が、である。これほど心が強い男はそうはいない。自分を大切に思いながらも最後の一場面で自分よりも仲間を大切にする。それが宮部久蔵ではないのかと思った。

この物語を読んで、考えることができたのは、本当によい経験になったと思う。人が今持つべき大切なこと、心の強さにふれることができた。

この物語は最後、宮部の特攻を受けたアメリカ空母の乗員の体験でしめくくられている。空母の優秀な迎撃をかいくぐり特攻をはたした宮部の胸ポケットには、妻と娘の写真がしまわれていたという。そして最後はその時の乗員の一人の言葉でしめられていた。

「奴は本物のエースだ。」

「日本にサムライがいたとすれば－奴だ。」と。

『永遠の0（ゼロ）』　百田尚樹　講談社

〈高松キャンパス　千頁読破記〉

佳　作

ベストセラーの法則

制御情報工学科３年　永谷　昌也

この夏休み、私は売れている本を読んだ。リアル鬼ごっこ、等を書いている山田悠介の本である。彼は今年で三十歳の若い作家なのだが、多くのベストセラーを出版している。しかし、これは何も意外なことではないのだ。

そもそも、面白い本、商業的にいう売れる本とは、どういったモノを指すのか。それは、読みやすく、且つ内容も良い作品である。当たり前のことだが、これが最重要なのであり、内容が面白くても読みにくければ面白さは伝わらないし、逆に読みやすくても内容が薄ければつまらない、となるのだ。その点、山田悠介の若さは有利である。若者にウケのいい現代調の会話文と短くキレのいい文章。一番の消費者層ともいえるティーンエイジャーの心を掴む文体は、この作家独特の個性の一つだ。だから、読みやすさの面では十分合格点であろう。

次に内容についてだが、これの良し悪しを判断するのは容易ではない。そこで、まずは良い内容というものの定義を決める。エンタメ性としてのコメディ、非日常（ファンタジー）といった要素とそれらの対極にある知識性（インテリジェンス）とのバランスが作品の雰囲気を決める。ここのバランス感覚にも山田は優れている。今季に読んだ小説の中で例を挙げてみよう。「オール」シリーズの主人公は、現実ではありえないような仕事を引きうけるなんでも屋に勤めているが、

東京の一流企業の仕事にやりがいを感じられず辞めてしまったという現実的な過去がある。また、「パラシュート」の主人公は、テロリストに拉致されるという非現実的な目に合うが、それまでは普通の大学生として暮らしていた。日常と幻想の織り交ぜ方の巧みさに若手とは思えない実力を感じさせる山田だが、「パーティ」の中では、全編フィクションである物語の中に、現実の地名を当てており、その知識性が更に現実とのつながりを感じさせるのだ。それと同時に山田作品の面白さが単に作者の才能からくるものではなく、徹底的な現地調査や下準備などの努力の要素が大きいのだ、とあらためて実感した。

山田作品は共通して、主人公が若い。先述したような作者の若さを存分に生かし、読者に共感を持たすために、主人公の年齢を低くするのは、小細工なしのダイレクトな設定であり、恐れることなくこういった挑戦ができるのも、彼の若さと情熱があるからこそなのだと思う。

若いうちからこういった実力を持った作家を、業界で異端者扱いするきらいがある。その作家の優れた部分を見ず、文章が子供っぽいなどと言って否定するのだ。しかし、私は今季いくつかの作品を読んで、それは違うのだと実感した。たしかに山田の文体は、そこらの売れないライトノベル作家と同じくらい稚拙かもしれない。しかし、彼の場合、それは計算なのだ。これはあくまで私個人の意見なので正しいかどうかは分からない。だから一度、あなた達にも読んでほしい。そして、彼の作品のたまに垣間見せる美しい文を心で感じてもらいたい。そうすることで、あれはやっぱり計算だったんだ、と納得してもらうことができるだろう。

長くなったが、私は今季の読書でとても有意義な時間を過ごせた。読んだ本は全て文庫であったのだが、もし機会があれば次はハードカバーを読みたいと思う。そして、また山田悠介の賢さの片鱗を見つけて、ニヤリとできれば嬉しい。

『オール』　山田悠介　角川書店　318P
『オールミッション2』　山田悠介　角川書店　327P
『パーティ』　山田悠介　角川書店　362P
『パラシュート』　山田悠介　幻冬舎　203P

佳 作

ミステリーの面白さ

1年1組　中井　都由

私は本を読むのが好きではありません。これといった好きなジャンルがあるわけでもないし、好きな作家がいるわけでもありません。だから毎年この時期、好きな本を選んでの読書感想文に困るんですよね。と、中学生のころ先生に言ったことがある。すると言われたのが、好きな本とか自分に合う本っていうのはどれだけでも読めるし、どれだけでも感想文なんて書けるということ。それと、そういう本を見つけるにはあまりに読む本の量が少なすぎだということ。そう言われてから、とりあえず何冊かの本を一気に読んでみた。そしてそのときにできた「好きなジャンル」の本を今回「一〇〇〇ページ読破」ということで読み直してみた。

今回読んだ本を並べてみて、自分の好きなジャンルは「ミステリー」なのかなと思った。それも一言で「ミステリー」と呼べないような、どこか「ホラー」の要素が入っている物語だ。その方が読みやすいと思った。感情移入しやすい気がする。

例えば今回読み直したのは、「告白」。二・三年前に大反響をよび映画にもなったミステリー系の話。第一章から第六章まであって登場人物それぞれの視点で描かれている。どの人物もゆがんでいる。でもどの人物の気持ちにも感情移入できる。前に読んだときには、こんなことがあったら怖いなあとか、全員が狂っているとしか思わなかったけれど、今は他にも感想をもつことができた。一つの殺人事件について、この人物が復讐するのもわかる。この人物の人格がどんどん壊れていくのもわかる。もちろん身近な人が殺されたり、自分が誰かを殺したりしたことはないのに、本当に登場人物の気持ちなんてわかるはずはないのだが。それほどまでに物語にのめり込めたのが驚きだ。この話は後味が悪い。第一章の人物が復讐を完成させて終わる。しかもその復讐が思い通りうまくいったのかどうかもわからないまま。私は自然と自分なりに物語の結末を想像した。復讐の全貌を告げられた加害者はどうなったのか。復讐を終えたその人はどうするのか。それは感想として言葉に表せるほど正確に考えたものではないのでここには書けないけれど、そうやって本を読んで考えをめぐらせるのはおもしろいと思った。少し前まで本を読むのは好きではなかったのに。大袈裟だと思うけれど、本を通して自分と全く違う人物の感情がわかるようになるのなら、それからは違う視点で周りを見られるかもしれない。視野が広がって新しく世界をみられるのかもしれない。他のジャンルの本も読んでみようと思う。

『告白』　湊かなえ　双葉社　268P
『死神の精度』　伊坂幸太郎　文藝春秋　345P
『ZOO2』　乙一　集英社　233P
『失はれる物語』　乙一　角川書店　381P

佳 作

図書館戦争シリーズを読んで

1年2組　大西あかね

いきなりですが、私は本を読むのが嫌いです。本は本でも漫画は好きですが…。だったらどんな本が嫌いなのかというと、もちろん小説です。私は、小説を読むのが嫌いです。理由は簡単です。読むのが面倒くさいからです。小さい文字をずっと読んでいると頭が痛くなってきます。それぐらい本を読むのが嫌いです。

でも、そんな私がこの夏休みに進んで読もうと思える本がありました。それは、有川浩さんの書く「図書館戦

争」シリーズです。なぜこの本かというと、夏休み前、漫画を買うために本屋に居た私ですが、ちょっと小説も見ようかなと思い、興味本位で小説の置いてある所に行きました。行ってみると、図書館戦争シリーズが目に入りました。そういやこの本って中学校の先生が読んでいたなぁと思い、どんな内容か気になったので、ちょっと立ち読みしました。そしたら不思議とどんどん読めていきました。これはきりがないなと思い、途中でやめました。でも、続きが気になって仕方がありませんでした。そこで、ちょうど宿題で1000ページ読破があるのだから、続きも気になるし、本嫌いを克服するのにはいいだろうと思い、このシリーズを読むことにしました。

私は、面白いと思える本なら簡単に読めるだろうと安易に考えていました。でもそれは、思っていた以上に大変でした。集中力はたびたび途切れるし、普段本を読まないので、しんどかったです。でも私は、少なくとも1日10ページは読もうと小さな目標を立てて読んでいきました。そして、初めて一冊読み終えたとき、ものすごい達成感に満ちていました。すがすがしかったです。私は、あの達成感をまた味わうために、頑張って読んでいきました。なぜか、この本は読んでいると、物語の情景が自然と頭の中に浮かんできて、より一層楽しめました。そして、四冊読み終えたとき、別冊がまだあることに気がつきました。これは読まなければと思い、予定していなかった別冊も読んでしまいました。

そして私は、この夏休みに計六冊読みました。これは、私にとってすごいことです。自分で自分をほめたいぐらいです。で、調子に乗ってオススメされた他の本も読んでやれと思い、読み始めました。が、三日坊主でした。その時、私は思いました。心の底から面白いと思える本しか最後まで読めないのだな…と。だから、オススメされた本とか、自分の興味のない話は読めないでいたのかとわかり、とてもいい経験をしました。

最後に、これだけで終わらせないように、心の底から面白いと思える本を探して、暇さえあれば、また本を読んでいきたいなと思います。

『図書館戦争』　有川浩　メディアワークス　345P
『図書館内乱』　有川浩　メディアワークス　355P
『図書館危機』　有川浩　メディアワークス　343P
『図書館革命』　有川浩　メディアワークス　333P
『別冊図書館戦争Ⅰ』　有川浩　アスキー・メディアワークス　273P
『別冊図書館戦争Ⅱ』　有川浩　アスキー・メディアワークス　286P

〈高松キャンパス　夏休み体験文〉

優秀賞

「精読」と「読書」

制御情報工学科３年　黒田　一弘

夏休み直前、物理学の先生から宿題が出された。「物理、電気・電子に関する本、一冊を精読しレポート用紙にまとめよ。」これを聞いたとき、私はあることを思いついた。「どうせ本を読まなければならないのなら、同じ本で読書感想文も書いてしまえ。」このような甘い考えで読み始めたのが、『図解・わかる電気と電子』である。高校数学で習う微分・積分の意味。自然対数の低e、円周率π、虚数iの意味とその関係。また、そこから分かるシュレディンガー方程式の見方。その他、波動、アトムテクノロジー、プラズマ、相対性理論、レビテーションなどについて書かれてある。しかし、この宿題は始めからつまずいてしまった。

私は、こう見えても読書家である。中学生のころは、毎日のように図書室に通っていたし、毎日にように本を読んでいた。また、その頃はハリー・ポッター（約五百ページ）を四時間弱で読破していた。つまり、私の言いたいことは、私は決して読書が苦手ではないということだ。しかし、私がこの本を一通り読むのに、約二週間かかった。気がつくと、八月である。その後も、（他の宿題をしながらではあるが）レポートを書くために、もう一度読み直し、今これを書いているのが、八月末である。今年の夏休みはこの宿題のためにあったと言っても過言ではない。

今一度、注目したいのが宿題の内容である。先生は宿題の内容を話すとき、「精読して」という言葉を使われた。「読書して」や「読んで」ではなく、「精読して」である。この本を読むときにつまずいた理由がここにあると思う。私が読む本のジャンルはフィクションやミステリー、たまに伝記で、専門書を読んだことはほとんどなかった。今回の宿題を通して気がついたことが一つある。それは「専門書は読書できない」ということである。これは、完全に私個人の考えで反論もあるかもしれない。しかし、私はこう考える。「読書」は一冊の本を読み、内容を理解すること、「精読」はその本自体では、全ての内容が理解できないためその他複数の本、資料を読み内容を理解することである。この本を精読するにあたって読んだ本、インターネットで調べた資料の数は、かぞえきれない。なんせ、分からない専門用語がたくさん出てくる。それが出てくるたびにそれを調べなければ先に進めない。教科書も専門書の一つであると考えられると思うが、私たちは教科書を読書できるだろうか。ほとんどの学生はその教科書にそった授業を先生から受けて内容を理解していると思う。授業とは、本や資料を読み理解するという本来、自分自身で行わなければならない作業を代わりに先生がしてくださるものである。つまり、教科書を読書することはできない。したがって、専門書は読書できないと言える。

しかし、ここで一つ問題が出てくる。授業をしている先生は、専門書を精読しているのだろうか。答えはノーである。先生は教科書の内容を完璧に理解しているだろう。私は、教科書の翻訳にGoogle翻訳を使う英語の先生を未だかつて見たことがない。先生はもも太郎を読むかの如く教科書を読むことができるだろう。こうなると、先ほど証明したことが怪しくになってくる。この問題を

解くため、私たち学生と先生の差を考えてみるとそれは、学力や知識の差だと思われる。学生と先生では雲泥の差があるが、私もこれからさらに勉強を続けていき知識や学力が増えれば、この本を読書できるようになるかもしれない。つまり、学力や知識が増えれば、読書できる本が増える。つまり、今、私が読書できるのはフィクションやミステリー、伝記といったジャンルの本で、精読するのが専門書である。

以上のことをまとめると、「人にはそれぞれ読書できる本と精読する本があり、それは学力や知識などによって変わる。それらが増えると読書できる本が増える。今の私のレベルではこの本は読書できない。」となる。自分の学力、知識不足を痛感した一冊であった。これからの目標は読書できる本を増やすことであり、来年の夏休みは専門書を読書して、読書感想文を書きたい。

『図解・わかる電気と電子』　見城尚志　講談社

〈詫間キャンパス　読書感想文〉

1位

「難病東大生」を読んで

1年7組　矢野友加里

今私は、平和に生活できていることが普通に感じている。そして、その生活は生きている間ずっと続くと思っていた。しかし、いきなり明日から体を動かすことができなくなったり、景色が見られなくなることを、あなたは想像できるだろうか？私なら、絶望を感じ、何をするにもやる気が起こらず生きることが辛いと感じる日々を送るだろう。しかしこの本に出会い、その考えや今の生活に対する考え方が変わった。

著者の内藤佐和子さんは、いつ発症するか分からない「多発性硬化症」という難病を持っている。そのことが原因で生活が明らかに変わった。「夢」がなくなり、交際中の彼に理解してもらえず、他人に話す事が怖く感じてしまった。そして、心の中にしまいこんでしまった。「自分の人生」が見えなくなり、涙が止まらず自分を見失っていた。そんな内藤さんがどうして前向きになれたのか、そして私たちに何を伝えたかったのか。それは、私が日々の生活でさりげなく感じていることだった。

内藤さんは医師から多発性硬化症の宣告を受けた時、最初は大きな悲しみを受けていたが、病気を受け入れ、今見ることのできる風景を、いままで以上に意識して見るようにした。この事から内藤さんが前向きで強い人だと思った。私が感じ取った事は間違いではなく、たくさんの勇気を私に与えてくれた。

内藤さんは、たくさん悩んだ結果、インターンに参加する事を決めた。たくさんの不安もあったが、それは貴重な体験となった。なんと、ベンチャー企業や大企業をはじめ、百人の社長と面会することができたのだ。この体験は、内藤さんが自分の意志で前に踏み出したからこそできたものだ。私なら前に踏み出すことを恐れ、できなかっただろう。そう考えたのは、ある体験をしたからだ。

中学生の時の授業中だった。自分の答えは出ているが、いつも手を挙げる事ができなかった。それは、自分の答えが正解だと解っていないからだ。間違っている事が怖くて、発表することができなかった。また、自分の意見を相手に伝えることにも怖さがあった。相手と意見が違うのが嫌だな、と思ってしまう。しかし、そんな事は当たり前だと分かっていた。だが、やはりどこか怖さが芽生え、自分の正直な気持ちを伝える事は少なかった。そう感じていた私だったが、内藤さんの前向きな姿勢に、私も前に踏み出してみようと思うことができた。

内藤さんは、難病になりいろんな事に気が付いた。それは、「一日は長い」という事だ。普段から「時間がたつのは早い」と多くの人の口から聞くと思う。しかし、長いと思ったことは少なくとも一回や二回はあるだろう。私は、なぜ長いと思うのか自分で考えてみた。それは、毎日を精一杯生活し、濃く、長く充実したものにしようと意識する事で、感じることができるのだと思った。こう考えたのは、自分自身が体験したことからだ。

これも中学生の話になる。私は吹奏楽部に所属していた。コンクールが迫ってくると、どうしても焦ってしまう。しかし、限られた練習時間の中でどれだけ練習内容を濃く、そして一生懸命取り組むかが大切だ、と顧問の先生に言われた。それから、私はその言葉を意識して、練習に取り組んだ。意識するだけでも、同じ練習時間とは思えないくらい効率よく練習ができた。普段から意識する事はほとんどないので、短いと感じてしまうのだと思う。私は、あの頃のように、毎日を充実したものにしていくためにも、意識しようと思う。

また、「家族や友達の大切さ」にも改めて気付かされた。このことも先ほどと同様に普段から感じる事はできないだろう。むしろ、親に怒りをぶつけたり、兄弟で喧嘩することのほうが多いだろう。それは家族が自分の近くにいることが普通だと感じているからだ。それは、家族だけではなく、友達等すべてに当てはまる。だが、自分が病気になった時、誰が看病をしてくれているだろう。自分が苦しんでいる時、一緒になって苦しんでくれるのは誰だろう。そう考えた時、一番に考えられる答えは友達、そして家族だ。ふと考えた時、改めてそう感じた。その考えるきっかけをくれたのも、この本のおかげだ。

この本は、私にたくさんの事を教えてくれた。それは、普段当たり前だと感じている事の裏でたくさんの感謝があるということだ。しかし、内藤さんが伝えたかった事はこのことではない。もっと他のところにあった。それは、「できない」と思う事は誰にでもあり、感じる事だが、その時に「できない」という「思い込みの壁」を取り外し、前を向くことが大切だ、ということを伝えたかったのだ。できることも気持ちのもちようで、結果が変わってくる。何事にも、「できる」という気持ちで取り組んでいくことが必要だ。そして、最後に自分の夢を叶えるためには、想像することで叶えられる。だから夢を諦めずに今の生

活を笑顔で生きていく。私はこの本を読み、そう生きていこうと思った。

『難病東大生　できないなんて、言わないで』
内藤佐和子　サンマーク出版

２位

命の尊さ

1年5組　石本美奈子

私は、この機会に命について考えようと思い、「神様のカルテ」を読むことにしました。

本を読み終えた時、すごく温かい気持ちになりました。それは、人の命の大切さもそうですが、もっと大切なものがあると教えられた感じがしました。

この本に出てくる「栗原一止」という人は悲しむことが苦手で「二四時間、三六五日対応」という看板を提げている病院で毎日忙しく働いていました。私は、「悲しむのが苦手」なのを読んで少しびっくりしました。

でも、実は患者さん想いで少し口ベタな所もあるけれどとても優しい人だということが分かりました。大学病院に進むべきかどうか悩んでいた栗原先生にやがて、大きな出会いがありました。

その人は、安曇さんという癌患者でした。安曇さんは優しくて明るい性格をしていたので看護師さん達に好かれていました。しかし、急に病気の状態が悪くなり余命一ヵ月の命だと告げられてしまいます。それでも前と変わらず周りに陽気に振る舞う安曇さんを見ているうちに、私は、「悲しいのは本人なのに、どうして明るいんだろう。」と思いました。栗原先生はその人と関わっていくうちに身体と心の病と戦うことの大変さなどが分かり始めてきました。

しかし、前に担当していた田川さんが膵臓癌という病気で亡くなってしまいました。吐き気と嘔吐、不眠が続いていて薬を調達していた矢先の出来事でした。自分がいかに苦しんでいる患者に対して無力なのかと自分を責めていた栗原先生の傍で妻であるハルさんや先輩である先生、友人がはげましていました。私は、人の生死に関わる仕事をしている人は周りの支えが必要な時もあるのだと思いました。

読み進めていくと、ある事に気がつきました。それは、人の生死について考えるのは、難しいはずなのに、気持ちがラクな感じで読めていました。栗原先生の口調、ハルさんのかわいさ、安曇さんのやさしさ、上司の先生方の思いやりが生死の過酷な現実を包みこみ、温かい物語になっていました。「神様のカルテ」を書いた夏川さんは本当にすごい人だと思いました。

最終的に栗原先生は迷っていた大学病院には行かない事を決めてお年寄りや末期癌患者と時間を過ごす事を選択しました。

最後に、私はこの本を読んでみて何となく手にしてみた本だけどいろいろなことを学びました。

一つは、人は必ず家族や親友、恋人など心の支えになってくれる人がいるという事です。今年の二十四時間テレビでも、東北大震災の事をしていました。今回の地震と津波で亡くなった方は多く、遺族や関係者はとても深い悲しみを背負って生きていました。自分のために涙を流してくれる存在がいることはとてもすばらしいことだと思いました。

二つめは、「前向きに生きること」でした。身体にハンディーを持っているにもかかわらず、誰もが「無理だ。」と思うような事を挑戦してみたりしていて、心の底から「頑張れ。」と応援したくなります。

医者という存在も病におかされた時の心の支えになるということを思いました。そして、これからは、つらい思いをしながら生きている人たちもこの世界のどこかに必ずいることを忘れないでおきたいです。

人の死に直面した時、不意に迫ってくる、限りある自分の人生の姿。そういうものを日々深く、深く考え続けなければいけないと思いました。

『神様のカルテ』夏川草介　小学館

２位

マルカの長い旅を読んで

1年5組　林　水輝

七歳の女の子マルカが、ユダヤ人狩りを逃れる旅の途中母とはぐれ、再び母とめぐり合うまで一人生き抜いた、実話に基づく感動の物語です。

この本を読んでいて感じたことは、七歳の泣き虫だったマルカが日がたつにつれ強く成長していったということです。七歳という小さなマルカが一人で頑張って生きようとしている姿にとても心が痛くなりました。「ユダヤ人狩り」がたくさんの命を犠牲にし、人の自由を奪ってまでもやるべきことだったのか？と私は強く思いました。本の中に「戦争が起きたのは自分のせいではないし、こんなことになったのも自分のせいではない」という文章がありました。私はこの文章を読んだ時、印をつけました。それは、自分の中で何か感じることがあったからだと思います。私は、中学校三年生の修学旅行で沖縄へ行きました。その沖縄で戦争のおそろしさをこの身体で感じました。それは「戦争は人を人でなくする」「戦争では何も解決できない」ということです。人の命が人の手によって奪われる…そんなこと考えたくありません。けれど、それは過去にこの日本でも現実にあったこと、今もなお世界のどこかの国であることです。命というものは一人一つずつしかもってなくて、みんな一人一人が違っています。どんなに「生きたい」と願っても生きられなかった人がいたということはすごく悲しいことです。ゲームみたいに何度もいきかえることのできない自分だけの大切な命。年をとって自然に死ぬということがどれだけ幸せなことなのかあらためて感じることができました。

旅の途中でマルカ達を助けてくれた人たちは本当に親切な人だと思いました。でも、人間だから「善」と「悪」の人がいます。悪の人が登場すると私は「何で助けてあげないの？」と少し苛立ちました。人一人の行動で、人を救えたり傷つけたりすることがあります。人との関わりから、人間が幸せにすごすためには誰かの支えが必要なのだと思います。マルカが捕まりドイツ人に質問をされた時、答えずにいるとポーランド人が怒鳴り、顔を殴った場面には衝撃を受けました。みんな生きている同じ人間なのに「ユダヤ人」というだけで、人が傷つかなければいけないのか？と疑問に思いました。

もし私がマルカだったら、家族と離ればなれになった時に生きる希望を失っていると思います。自分一人では何もできなくて、ただただ必死に逃げていただけだと思います。母とも再会できずにどこかで亡くなっていたかもしれません。そう考えるとマルカは立派だと思います。日々の空腹や寒さとの闘い。子どもながら精一杯知恵をしぼって生きようとするマルカは輝いていました。私はそんなマルカを見習いたいです。私があたり前のようにすごしている今日もこの本の中なら、生きることのできなかった今日になっていたかもしれません。

今の時代の日本という国に生まれてよかったと心からそう思います。

『マルカの長い旅』
ミリヤム・プレスラー　　松永美穂 訳
徳間書店

２位

親子間の愛情

電子システム工学科２年　河田　紗希

一体どのくらい自分の親を大好きな人がいるだろうか。よく見る結婚式などで親への感謝を涙ぐんで話すシーン。私には理解できないでいる、未だに。まだ高校生なのであたり前かもしれないが。ただ、よく友人が自分の親との幸せな生活について話しているのを聞くと無性に羨ましくなる。家族のゴタゴタは、どこにでもあって親が好きになれない時は誰にでもあるはずだ。しかし、親とは感謝すべき存在である。敬うべき存在であるのだと思う。分かってはいるのだけど、なかなか難しく、そこを恥ずかしいとも思ってきた。そんな時、この本を手にとった。絵本作家として有名な著者が自分の母親との関係を書いたというところから興味がわいた。著者は、この本の中で「母を愛せなかった自責」と「母を捨てたという罪悪感」について何度もつづっているが、正直私には難しく理解できない部分も多かった。だが時々、自分と重ね合わせて共感するところがあった。そして、この本を読んで少しだけ、素直になれた気がした。

このお話は、著者の佐野洋子さんが幼少の頃から七十歳位までの母との、家族との思い出の話である。昔から洋子さんに厳しく、強い女性であった洋子さんの母であったが、ある時洋子さんがつなごうとした手を「チッ」と言ってふりはらった。そこから洋子さんとシズコさん（洋子さんの母）との厳しい関係が始まっていった。終戦後、母は五人の子を抱えて中国から引きあげ、その後三人の子を亡くしても、たくましく生き、子を大学まで行かせる。若かった頃の母の話を読んで正直すごいなぁと思った。でもシズコさんは悪い事をしても他人に絶対に、あやまらない。他人に厳しいのに、そんな事を毎回されていたら本当に嫌いになるだろう。何度も洋子さんのいらだちを感じさせる出来事の文章はでてくるのだが、その中でも私が印象にのこっている事は、シズコさんの兄弟がでてくるところだ。シゲちゃんとキミちゃんと呼ばれる二人は少し障害のある人だ。たまたま会いにいったときシズコさんは「親戚の人」と洋子さんに言い、兄弟とは言わなかった。二人がシズコさんに近寄ると「気持ち悪い、近寄らないで。」と言ったのだ。私は、その言葉に驚いた。血のつながった兄弟なのにである。兄弟が居ない私が言うのも変かもしれないが毛嫌いしすぎだと思った。それに彼らはシズコさんを怖がっている。何の危害を加えるつもりもないのにである。そして色々な事がありながらも洋子さんは、母を好きになれないという自責の念に追われ続けたのだ。何度も言いあらそい反発しながらも。

それから、だんだんと呆けていった。結局シズコさんは施設に入った。呆けは進み、自分が結婚している事を忘れ、子供を三人も亡くした事を忘れていった。私は洋子さんや洋子さんの妹のことは覚えているのに、どんどん悲しかった思い出を忘れていくのを見て嫌なことから忘れるのかと不思議に思った。でも呆けたことによって奇跡を起こしたんだと思った。それは、洋子さんがベッドで弱りゆく母を見て、どんどん可愛くなっていく母を見て、涙を流し「ごめん」と言ったことである。本人も思っていない言葉だったらしいが、母も同じ様にあやまったのだ。絶対に言わなかった「ごめんなさい」を言ったのだ。その時、自責の念から解放されたとつづっている。私もこの時、すごく感動した。やっぱり色々な事があっても二人は信頼しあっていたのだと思った。

私も、いつか認めることができるだろうか。洋子さんの様に愛することができるのだろうか。まだまだ分からない。でも、少しずつ、本当に少しずつだけど見方を変えていけたらいいなと思う。

『シズコさん』　佐野洋子　新潮社

３位

表裏一体の謎

1年6組　間部　僚太

ジーキル博士とハイド氏のように、私は人間誰しもが少なからず多重人格性を持っているものだと考えています。なぜならば自分以外にこの地球上には多くの人々が存在し、国民性や民族性という多種多様の中で、一人一

人の個はお互いに尊重しながらも、時には、自分には全く考えもつかないような考え方を持つ人が、まるで物語の登場人物であるかのように自分の前に現われ、驚く瞬間も数知れず、そういうことの繰り返しの中で、人は生きているのかもしれないと思うからです。また、いつしか相手の姿が自分の鏡となって別人になってしまったかのような錯覚に陥りそうになったことも多々あります。

この物語のジーキル博士は優れた医者であり、大変立派な紳士であり、また、人のために尽くす生き方の途を知った本当に善の人として感じさせる人物像の反面、ハイド氏は、その多重人格の極端な例で、人を殴ることに抵抗を感じないなど、ジーキル博士とは真逆に描かれていました。とても同一人物とは思えない印象で、恐怖にさえ思えました。

この本を読んで、いかに自分の欲望に流されずに生きてゆくことが難しいのかを実感するような思いでした。自分は音楽を聞くのが趣味で、CDを買ったり、借りたりして聞いています。ですが、学生なのでCDを買うこともままなりません。そこで、ネットから音源を取ってくればいいのでは…？という欲求が心の中で鎌首をもたげますが、そういう違法な事は絶対にしてはいけないと法律で定められています。なので、自分は、パッケージで買うようにしています。欲しかったものを買うために、お小遣いのやりくりの中で、やっとの思いで買えた時の喜びは、人間である故の感情を生み出すことのできる至福の瞬間を味わえられる人間ならではの幸せと感じる自分です。

ジーキル博士は、自分以外の自分を生み出すために研究の末、薬を開発し、自己満足を得るために薬を飲用し、身から変身させたハイド氏を造り出すことに成功させました。自分の中では、こうしなければならない理由がどこまでページを進めても分からず、頭の中が混乱し続けました。ジーキル博士本人自身が自分を信じきれていないところから人生を破滅させてしまったような印象に、切なさが漂う感じがしました。学者としての地位や名誉を持ちつつ、その先を読み続けても、家族という存在がほとんど見えなかったところに根元的な原因が潜んでいるのではないのだろうかと思いはじめました。

自分が大きな悩みにぶつかった時、相談したのが両親でした。気持ちが楽になり、いつしか悩みも解決させることができました。悩みは一端解決したかと思っても、次から次へと姿を変え、まるで山のうねりのように連鎖したりします。一つ一つの山を登ったり下ったりするうちに成長するのも人間である故と強く思います。また、家族以外、知りあって始まった友人との友情の継続はなかなか難しいものもありますが、時の流れと重なりの中で、変化の連続と共に築かれてゆくものと信じて、自分の歩む道を真直ぐに進んでゆきたいと思います。

『ジーキル博士とハイド氏』
スティーヴンソン　田中西二郎訳　新潮社

3位

シャングリ・ラを読んで

1年7組　海山　未央

私がこの本を読み終えた時、なんともいえない未来への不安に襲われ、ただ部屋の天井を見上げ続けていた。ただ、なぜ人はこんなにも自分たちのことしか考えていないのだろうかと考え続けていた。

読んでいて初めて違和感を覚えたのは、序盤の國子がドゥオモでの生活に戻るあたりだ。このあたりでこの本の日本の未来について書かれているが、それは今生きている私にとても悲しいようなことばかりだ。現在エコカーや、リサイクル商品など、地球環境を保護するように各国でも推進されている。しかし、どんなに頑張ろうとも二酸化炭素は出続けている。この本は「それが出続けたせいでこうなった。」とも訴えかけているように感じた。まるで今の世界の努力は無駄だとでも語りかけているような。

だとすればとても悲しい。ただ悲しいと思う。そして本気で地球温暖化を防ごうとしても今の人は金がある範囲でしないだろう。

いつから人の思いは金に縛られるようになったのか。私の生まれるずっと前の世界や日本はこうではなかっただろうに。もう一度世界が利益なしに地球について考えてほしいと思う。両方を手に入れることはもう無理に近いことだと思うから。

そういえば炭素の売買のことについて中学生の時に学んだことがある。あまりニュースでは取り上げられないのを見る限り、注目度は低いのだろうが、これも人の思いが環境よりも金銭で動いていることを指すものだと思う。國子はカーボニストとして炭素経済を凝視していたが、経済がすべて炭素に移行してしまう日がもしかしたら本当に来るかもしれないと思う。移行するとなるとかなりの国が反対するだろう。損なことが現状では多いからだ。例えるなら発展途上国の排気ガスが上げられる。しかしうまくそれを逆手に取れば儲かる可能性がある。将来そこへみなが手を伸ばすと考えると嫌になる。エコノミーとエコロジー、そしてテクノロジーを融合して考えてほしくないと思う。両者が得するというのはほぼないはずなのに、こうしたことをすればさらに事態は悪化する一方だと考える。便利な方へ考えるのではなく、物事に対してより有効な方向で考えるべきだと強く思う。

今この地球の将来を危惧させている地球温暖化。この問題は人間という一種の生命が引き起こしているということを國子たちの行動に感じさせられた。そして最後、超高層建造物アトラスが崩れ、森林化を押し進めた地上でこれからどうやって日本を動かしていくか模索する國子を見て、どんなに過ちを犯しても、やり直すことはできるという希望を感じた。自分もこの國子のように心を強く持ってこの地球を大切にしていきたいと思う。

『シャングリ・ラ』
池上永一　角川書店